# オー、マイ、パパ。クラター氏

牧野　剛

《四国三郎で産湯につかり、黒髪春風になびかせ、讃岐うどんに〝すだち〟を使い、早メシ早グソ早打ちの、香川健児ここにあり。男伊達だよ、倉田のボンは、女通いの明暮に、ほれた弱みがウンのつき。……》

左指の先が、まるで長時間正座し急に立ち上って「痺れ」がやって来たように、血管や神経の端々でスパークし、むず痒く痛い。このまま左半身の感覚を失い、運動能力を失えば、まるでパパみたいだ。

パパのように「半身不随」の肉体が、はたして人間の精神に何を与え、何を奪い去るのか。他人であり健常者である者にとっては、想像は難い。その「不自由」が、他人を見たり、社会を考えたり、数学を解くときにどう働くのか、そこのところを想像することは、予想以上に困難である。しかし、ある日突然にやって



来た私の体の変調は、クラター氏のことをまるで身体レベルから思い出すきっかけをもたらし、図らずもクラター氏への追憶へと私を誘った。まるで、パパが、彼岸への招待状を私に送ってきたように。

実は、倉田さんのことを思い出そうとしても、どうしても彼がこの世にいないという実感がなく、四国に帰っただけだという気がしてならない。そして当然にも、また突然帰って来る気がしてならぬ。そして「ワッハッハ」と笑って、「死んだのウソ」なんて言いそうだ。そうした思いの中で、いつどこで、どのように出会ったかなどと考えてみても、どうしてもはっきりしないのである。それどころか、まだ出会っていないような気さえもする。暗闇の奥で何かなくしたものを探していて、しかもそれが何なのかも分からないという二重の絶望を、いやもっと何かとらえどころのないうすぼんやりした雰囲気をもたらすのである。現実のあの倉田さんの、「濃い」顔や肉体的特徴、ダミ声、皮肉やユーモアやそして大言壮語が大好きというアナーキーな、あの肉太のはっきりした精神や姿とは、まったく逆のぼんやりした像が浮かぶ。なぜか。

倉田さんを初めて知ったのは、日大闘争のことを書いた本の中でのことであったのだろうか。それとも、ユニークな数学者たちの一団のことを聞き及んでのことであったのか、あるいは佐世保のエンタープライズ入港時の、〝三派全学連〟九大籠城事件の折のことか、米軍機墜落による九大闘争での〝造反教官〟としてか、もっと下って、伝習館闘争の中でのことか。どの場面でも、彼は鮮烈な印象であった。とても、暗闇の中の探し物の比ではない。

ただ現実の倉田さんの「半身不随」の肉体を見た後では、いささかイメージを変えざるを得ない。会って酒を一緒に飲んでも、奥さんとのタバコをめぐるイザコザや数学のことを聞いても、何かすべてが倉田さん

の作り話、つまり彼の入れ子になった何重ものフタがある宝の箱の中からの、みんなを驚かす贈り物としか考えられなくなってしまっている自分を発見してしまう。たぶん、この氏の現実の非行動性と言語的飛翔性の乖離が、氏の実体を、氏の思惑どおり混乱させ、思想や精神のアナーキーを顕在させ、人々を煙にまいていたのである。

さて、河合塾が、巨大三大予備校（ＳＫＹ）全国制覇戦に参戦した二十年ほど前、当時の福岡事務所のメンバーが「独断専行」的に、生徒募集に失敗し倒産した「平和台予備校を救済する」という名目で、そこを生徒・教師・職員付きで手に入れてしまうという出来事が起った。どうしてこんなことがあるのか分からないが、これに対して、名古屋の河合塾の本部は冷たく、「自分たちでやれ」と突きはなした。つまり、講師の派遣を請け負わなかったのである。そのことがもたらした事態は、小論文の採点作業のためにその年の十二月の下旬に私が福岡に行った折、来春四月開塾なのにまだほとんど講師が集まっていない、と事務方から泣きつかれたことで容易に推測できる。私は、実は、当時の福岡事務所のメンバーの、Ｆ氏、Ｍ氏らとは、名古屋校での、ひょんな事件（私が授業の遅れを取り戻すために行なった、地下食堂での数百人の塾生の時間外授業・集会が、「河合塾に学生運動が起った」と連絡されたために、事務局よりＦ・Ｏ両氏がやめるよう地下食堂に説得に来て、逆に私に壇上に乗せられ弁解させられた事件）で知り合っていたこともあって、講師集めに一肌ぬぐことになったのである。

ところで当時、河合塾は今ほど全国では名前が売れていなかった。東京や大阪、福岡や仙台、つまり名古屋以外では、「河合楽器」と混同されていて、私も常に「ピアノの先生」と思われる始末であった。それだから、今のように簡単には講師の募集がままならなかったわけで、福岡事務所は困りきっていたわけである。私はそうした話を聞きながら、前から考えていた一つの方針の実行を決断し、事務方へ協力することを申し出たのであった。

その一つとは、高校生のとき読んでいた谷川雁、森崎和江や九州サークル村の人たちを核に何かできないかということであり、そして、九大、熊大等の全共闘派への連絡であり、何人かの大学教師等への話しかけをすることであった。電話で哲学者の九大の滝沢克己先生を始め、熊大の末吉先生、「豆腐屋の四季」の作家・松下竜一氏などに話をしたり、そして、佐世保闘争や九電火力発電所反対一株株主運動・伝説の平井晃治さんなど、一ヶ月間に、実にさまざまな人々と話したり会ったりして、講師になれそうなメンバーを探した。そして、実に二十名近くを紹介することになったのである。ところで、そのとき話をしたほとんどすべての人が、私に「茅嶋洋一氏に会うべきだ」と言ったのである。私自身彼のことは、ずっと前から本で読んだり、友人たちに伝え聞いた話で知っていた。そして会った。

茅嶋さんに会うと、彼は「すでに自分は人生の浪人を決めており、もう一切仕事はやらぬ」と開口一番、私のさそいを拒否した。しかし、私もそこはそれ「口説の徒」の一人、ただちに「その人生の浪人こそ、受験の浪人の講師にふさわしい」と応じ、茅嶋さんをくどき落したのである。その話し方に何か感じたのであろうか、茅嶋さんが「倉田さんを知っているか」と私に訊ねた。その後も、さまざまな人が、同じ質問を私に繰り返したのである。私は、本を読んで、つまり日大闘争や、九大闘争、伝習館闘争の中で倉田さんのことを知っていたのだが、なぜこれほどまでに多くの人が、私に倉田さんのことを言うのかわからなかった。倉田さんと私とは父子のように風貌が似ているという話だったが、単に風貌が似ているだけでは納得が行か

ない。もっと何か、本質的な部分で同型なのではあるまいか、そう考えた。しかし、福岡校が何とか開塾して、私が毎週福岡に授業に行っていても、倉田さんと出会うことは全くなかったのである。

「オー、マイ、サン!!」

クラター氏の独特の節回しと、ある種、高くダミ声ではあるが、美声とも言える大声が、その暗いバーの中一杯に広がった。そこに居合わせた皆が爆笑する。芝居がかった台詞と足をひきずって歩くその姿が、また変に合っている。両手は、なんと息子を抱くために大きく広げられ、自分のために作られた場面を完全に掌握しこなす名優の風格で、自信に満ちた登場であった。私は一瞬メマイを感じたが、ここで引いては私のアイデンティティ「口先男」が地に落ちよう。この場面における自分の役割りを演じねばならない。すぐさま決断し、当然のような顔をして両手を広げ大声を上げた。

「オー、マイ、パパ!!」

拍手喝采、爆笑。おひねりが飛び、掛け声がかかる。「播磨屋!!」

その後、倉田さんには「木曽路へ旅をしたことがないか。戦争中に、私の母に会って恋に落ちたことはないか」などと何度も問うただけではなく、「実は倉田さんは、みんなに同情を得るため、杖をついて、身体が悪いふりはしているが、みんなが見ていない所では、杖を捨ててすごいスピードで走っているのではないか」などというデマを作り周辺に流した。こうした話は、クラター氏を幸せにし、そうなればなったで、いっそう彼を興に乗せることになる。その初対面の夜も、さまざまな口上やら映画の場面の再現やら、京大教授Y氏の痔のことだの、縦横無尽、メチャメチャかつアナーキーな話が彼の口から飛び出し、まるでビック



リ箱をころがしたような状況が全面展開され、知らぬ間に博多の夜はぶけていったのであります、はい。

これが、倉田さんとの忘れもしない混沌に満ちた——その後の付き合いを十分予感させる——初対面の夜であった。

左指先の痺れが、足先へ、半身へと、徐々に勢力圏を広げていくに従って、暗闇の奥の方で、〈$P=NP$〉問題が、あるいは、ある整数題($a^n+b^n=c^n$の$n$の一般解)の解答がひらめく。これでは、なんと、ああパパと同じ大言壮語癖が出てしまったのではないか。

「オー、マイ、パパ!! 近くまた」

破天荒の人 倉田令二朗

二〇〇三年一二月一〇日発行 [非売品]

編集・発行 倉田令二朗追悼文集刊行会
[編集委員長] 齋藤正彦
[編集委員] 相京範昭 加藤万里 亀井哲治郎
茅嶋洋一 清水達雄 杉浦光夫
竹内外史

カバー・表紙・扉デザイン 駒井佑二
印刷・製本 精文堂印刷株式会社
〒116-0012 東京都荒川区東尾久一―三六―四

Printed in Japan

[連絡先]

＊河合文化教育研究所
〒464-8610 名古屋市千種区今池 2-1-10
TEL.(052)735-1706

＊亀井哲治郎
〒264-0032 千葉市若葉区みつわ台 5-3-13-2
亀書房
FAX.(043)255-5709
E-mail : kame-shobo@nifty.com

＊倉田ヒデ子
〒763-0043 丸亀市通町 165-2 愚令ビル
TEL.(0877)58-3015

なお，本書についてのお問い合わせは，
河合文化教育研究所または亀井宛にお願いいたします。